わたしの聖戦（ジ・ハード）

女性が働くということ

医学ジャーナリスト・医学博士　植田美津恵

(152)

信長とヒトラー

信長が、本能寺の変で命果てるとき、「是非に及ばず」と口にしたことはよく知られている。「これが天の定めた運命なら受け入れるしかない」、あるいは、（謀反の相手が光秀なら）「しかたがない」、いずれにも解釈できる。思いがけず、無念や憤怒の感情を見せることなく、さっさとあきらめた風情である。しかし、いったい誰がこのセリフを聞いたのか？　漠然とした疑問を覚えていたところ、それが太田牛一の「信長公記」に記されていたことを知り、すんなりと納得した。そのとき牛一は本能寺にはいなかった。のちに、間際で逃げたお付きの下女たちに聞き取り調査をしたと伝えられている。

太田牛一は、信長の家臣のひとり。信長の破天荒な魅力に惹かれ、彼の発言や行動を書き綴り、それがのちに「信長公記」としてまとめられたという。テレビなどで描かれる信長の奇行や言動の元のほとんどはここにある。

全部で15巻あるこの書物の末尾は、常に「珍重、珍重」で終わっているという。さしずめ「めでたし、めでたし」といったところだろうか。ただし、信長が死ぬ15巻目だけにはそれがない。

かたや、ヒトラーである。このふたりがよく似ているとの声は、ネットでも多数目にする。目に宿る狂気や世を制覇しようとの強い欲望を抱いていたところなど、似ているといえば似ている。ちなみに、信長は若い頃はうつけと呼ばれ、ヒトラーは学校の勉強がからきしできなかった。画家になりたかった夢を果たせなかったのは、画家になるべく学校に合格できなかったためである。しかも二度落ちている。

信長の敵は旧態依然としたしきたりだった。過去を切り捨て、常に新しいものや未来に関心が向いていた。自分の納得いく国づくりを邪魔するものは容赦なく叩きのめしてのしあがっていった。懐の深さを見せたかと思えば、冷酷無情な面も隠しはしなかった。

ヒトラーの敵はユダヤ人だ。もともとヨーロッパで嫌われていたユダヤ人を抹殺することで大衆の心を引きつけ、大衆の力で世界を牛耳ろうと試みた。

似ているのは、彼らの残虐さを知っても尚、私たちを惹きつけてやまない彼らの「魔力」である。繰り返しドラマなどで描かれる信長と、研究書の出版が絶えないヒトラー。くやしいが、両者が持つ魅力に、私たちは目を背けることができないでいる。

同じ時代に生きることができたら少しは彼らのことが理解できるかもといわんばかりに、コミックの「信長協奏曲」はドラマになり、若いドイツ人の手による小説「帰ってきたヒトラー」はこの秋映画化される。前者は、現代の高校生がタイムスリップして信長と入れ替わる設定。後者は、自殺直前までの記憶を失くしたヒトラーが現代ドイツに蘇る話である。どちらも荒唐無稽。ありえない。しかしこれがまたウケているのも事実である。

少なくとも、平和な世の中には生まれないタイプのふたりである。乱世だからこそ、大衆は彼らを必要としたし、彼らもまたその声に応えようとした。信長やヒトラーが大衆を操ったわけではなく、彼らが大衆に操られたのかもしれない。

何はともあれ、乱世は遠い歴史となった。めでたし、めでたし、である。

イラスト・伊藤栄章